

民俗学における食習研究の視点

Perspectives on *Shokushu* (Eating Habits) as Part of Folk Traditions

関沢まゆみ

SEKIZAWA Mayumi

- ① 民俗学の食習への関心
- ② 民間伝承の会と『食習採集手帖』
- ③ 戦後の全国調査
- ④ 食の習俗と観念の変化
- ⑤ まとめ—伝承の中の希薄化と底流と

【論文要旨】

本論の目的は、民俗学の食習調査の理念の確認と、食習調査やその後の民俗資料緊急調査等の食習に関する資料から、とくに食制つまり食べ方を中心とした「食習と観念」の変化について分析を行なうことである。

柳田國男は、食品、食制、食料、食具の4項目に分けて、なかでも食制研究を重視していた。民間伝承の会による「食習調査」(昭和16, 17年)もこの枠組みを背景に項目立てがなされていたといえる。従来、この食習調査は大政翼賛会の委託によるものであることが強調されて、その内容の分析は十分行なわれてこなかった。その後、全国調査としては、高度経済成長期の昭和37年以降、文化財保護部(現文化庁文化財部)による民俗資料緊急調査が行なわれ、さらに、昭和50～60年代の農山漁村文化協会による『日本の食生活全集』が刊行されている。これらは、食べるものや食べることについては記述がなされており、貴重であるが、食べる意味についての分析はとくになされていない。そこで、前述の民俗学が調査し記録してきた食習に関する資料から、とくに食べ方を中心とした食習と観念の変化について検討を試みた。12月の晦日に家族そろって年神を迎える忌み籠りに際して、年取りの儀礼として白飯を食していたこと、先祖の命日や節日などには家族が精進食をとる精進日が定められていたこと、屋外で弁当を食べたり、川原で煮炊きする時には、自然界の霊的なものたちに対しても少し食べ物を分け与える「ホカイ」の習俗が伝承されてきていたこと、などを述べた。しかし、このような忌み籠りや忌み慎みの観念、自然への畏怖と共食感覚などが、現在では希薄になり喪失してきている。それは高度経済成長期の生活変化の延長線上で加速化してきているといる。しかしさまざまな儀礼食の伝承の希薄化や喪失のなかで、現在でもこのような伝承を大切にしている事例も一部に存在することに注目した。そして、そこから民俗伝承というのは変遷をとめないながらも消滅のない運動であるということを指摘した。

【キーワード】 食習調査、食制、民俗資料緊急調査、年取りの白飯、精進日